

一般社団法人「技の環」発足 文化財や伝統工芸の 原材料調達をサポートします

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 久津輪 雅



今年2月、私は「技の環（ぎのわ）」という名前の一般社団法人を立ち上げ、代表理事に就任しました。森林文化アカデミーの教員を務めながら二足の草鞋を履いています（勤務時間外や休日活動）。この団体のキャッチフレーズは「伝統の技を支え、人をつなぎ、環をつくる」。文化財の保存修理や伝統工芸品の製作などに携わる人が抱える3つの課題、「人（後継者）」「原材料」「道具」、これらの解決を支援するための組織です。県庁の文化伝承課からの業務委託を受けています。

スタッフは美濃窓口と飛騨窓口に2人ずつ。美濃には私と、森林文化アカデミー卒業生。飛騨には元岐阜県工業技術研究所長と、工芸コーディネーターとして活動する人です。

この団体を立ち上げることにしたのは理由があります。まず、私自身が10年以上前から伝統工芸の材料収穫の支援をしてきたこと。最初は、長良川鶺鴒飼で鶺鴒を運ぶのに使う「鶺鴒籠」の材料でした。一般的な竹籠にはマダケが使

われますが、鶺鴒用具には水切れが良く丈夫なハチクが使われます。竹林はそこらじゅうで繁殖しすぎて困るほどですが、実は工芸に使う良質の竹となるとそう簡単ではないのです。節と節の間が長く、ほどよく間引きされて表皮に傷が少ないなど、さまざまな条件を満たす必要があります。アカデミーの卒業生が鶺鴒籠を作る竹細工職人になったことから、アカデミーでも授業で竹林整備や収穫を行っています。

次に、和傘の傘骨を束ねる「傘口クロ」と呼ばれる部品に使われるエゴノキ。細かい切込みを入れても折れない粘り強さと、ほどよい硬さを併せ持ちます。これも、材料を収穫する林業家が亡くなったことをきっかけにアカデミーを中心にプロジェクトを立ち上げ、その後は和傘職人の人たちとともに毎年授業で収穫しています。このプロジェクトは開始から12年が経ち、今では材料の収穫から、苗の育成、植樹へと活動が広がってきました。

に編んで留めるのに使います。近年、樹皮を採る人がいなくなり、遠く秋田県や奈良県で購入していると聞き、県内で調達できる所を探しました。このように、文化財や伝統工芸に使われる材料にはその土地で育つ森林資源が多く使われますが、森林の利用の仕方が変わったために材料を供給する仕組みが失われていきます。それをつなぎ直す仕組みを作るのが団体設立の目的です。

また、行政の縦割りをつなぐ必要性を感じたことも理由の一つです。岐阜県庁で言えば、文化財は文化伝承課、伝統工芸品は地域産業課、森林資源は林政課となります。国で言えば、経産省、文化庁、林野庁です。こうした伝統文化を次の世代へ伝えていくためにはこれらの部署で情報交換や連携が必要ですが、その仕組みがありませんでした。そこでハブ役を担うために民間団体を作ったのです。さらに岐阜県の伝統文化を支えるためには、県外の原材料生産者や道具製作者を支える必要もあります。たとえば美濃和紙に使われる楮、関の日本刀の鍛錬に使われる松炭、飛騨の一位一刀彫に使われる様々な彫刻刀など。これらのほとんどは県外から調達しています。県境を超えて調査や支援の活動をするには行政が直営で行うのは難しく、民間が行った方が合理的です。

技の環ではウェブサイトを立ち上げ、課題を抱える職人がいつでも相談を寄せられるようにしています。そして私たちも相談が来るのを待つのではなく、積極的に現場へ出かけて課題を聞き取り、対応できることから取り組んでいます。みなさんの周りで伝統技術の継承に課題を抱えている人がいたら、ぜひ技の環をご紹介ください。



技の環のウェブサイト <https://ginowa.org/>